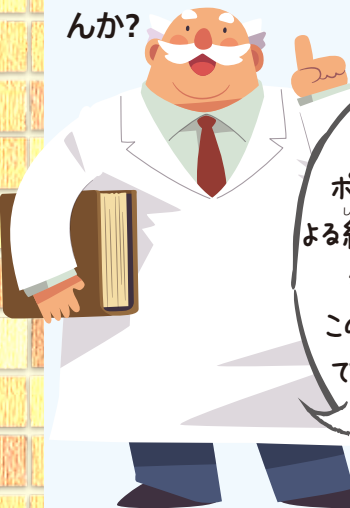


港区立郷土歴史館へ 行ってみよう!

令和7(2025)年は、アジア・太平洋戦争の終戦から80年目となります。この節目の年の夏休み企画展では、戦時下での暮らしや戦後の復興などについて展示します。この夏休み企画展をとおして、戦争の恐ろしさと平和の大切さを見つめなおしてみませんか?



昭和20(1945)年8月15日、戦争で不利になった日本は、ポツダム宣言を受け入れ、無条件降伏による終戦を国民へ伝えたよ。しかし、終戦後も物資の不足で人びとは苦しんでおった。この時、新橋駅周辺に新橋マーケットができた。これは法律違反の闇市じゃが、人びとはここで商品を買ひ、新たな暮らしの一步をふみ出したぞ。



みなと図書館のある芝公園には、「こども平和塔」という白いモニュメントがあるよ。これは、終戦して間もない頃の小学生、中学生の寄付金も使って、建てられたものなんだって。

現在のこども平和塔
昭和29(1954)年建設
所在地：芝公園4号地



戦争の悲惨さを体験した人びとが、後世の子どもたちに平和の大切さを忘れないようにと、多くの人が集まる公園に建てたものなんだね。

港区立郷土歴史館 令和7年度夏休み企画展

港区平和都市宣言40周年記念

終戦80年 戦争を見つめなおそう

おとなも
学べる

会期：令和7(2025)年7月5日(土)～9月30日(火)



人びとでにぎわう新橋マーケット
(アメリカ国立公文書館蔵)

港区立郷土歴史館

歴史館ファイル

40 みんなと結ぶ「へいわ」
—港区平和都市宣言40周年—

MINATO
CITY
LOCAL
HISTORY
MUSEUM

vol. 7

港区平和都市宣言40周年記念

終戦80年 戦争を見つめなおそう



戦争の影響が残る終戦直後の新橋駅周辺
(アメリカ国立公文書館蔵)

令和7(2025)年は
アジア・太平洋戦争が終わって、
ちょうど80年目なんだって。

建物のがれきも
写っているね。戦争中の
人びとは、どんな思い
だったのかな?



油脂焼夷弾の弾筒

これは現在、麻布台ヒルズの敷地となっている場所から出土したものです。火薬とジェル状の油脂がつまった焼夷弾が投下され、昭和20(1945)年にまちは炎に包まれました。

港区立郷土歴史館 利用のご案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(土曜日のみ午後8時まで)
※有料展示室の入館受付は閉館の30分前まで。
- 休館日 毎月第3木曜日/年末年始(12月29日～1月3日)/特別整理期間
- 常設展観覧料 大人 300円 小・中・高校生 100円
※特別展・企画展は別料金です。
※区内在住・在学の小・中・高校生、区内在住の65歳以上の方、区内在住の障害者とその介助者(1名)の観覧料は無料となります(証明ができるものをご持参ください)。

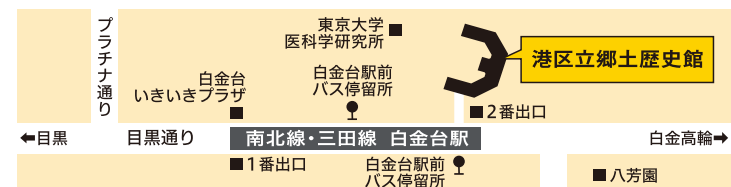
●公式ホームページ

minato-rekishishi.com

歴史館の最新情報はこちら→



●公式SNS



- アクセス 東京メトロ南北線・都営三田線「白金台」駅 2番出口 徒歩1分
都営バス・東急バス「白金台駅前」停留所 徒歩1分
※一般車両用の駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。
※障害者用の駐車場がございます。

歴史館ファイル 令和7(2025)年6月20日発行
発行：港区立郷土歴史館

〒108-0071 東京都港区白金台4-6-2 ゆかしの社内
電話：03-6450-2107 FAX：03-6450-2137

港区は、みどりの保全とごみの減量に努めています。この印刷物は、古紙を利用した再生紙を使用しています。



アジア・太平洋戦争

アジア・太平洋戦争とは、中国やアメリカなどの国と日本が戦った戦争じゃ。日本は、昭和12(1937)年に中国、昭和16(1941)年にアメリカやイギリスなどと戦争を始めたよ。戦争中の政府は統制を強め、人びとは不自由な生活をいれたんじゅ。この戦争では、東京などの都市が空襲され、多くの人びとが犠牲になったのじゃ。

戦地へ向かう人びと

満20歳になった男性のうち、徴兵検査に合格し、抽選で選ばれた人は、戦地で戦うことになりました。しかし、戦争が激しくなると、抽選の廃止やそれまで兵役につかなくてもよいとされていた学生なども戦争に動員されることになります。その結果、多くの人びとが向かった先の戦地で亡くなりました。



現役兵証書

徴兵検査に合格し、この証書が発給されると兵役につくことになりました。

女性たちによる兵士の見送り

愛国婦人会芝区分会『みちしばのしをり』より。昭和15(1940)年頃の写真です。

寄せ書き入りの日章旗

戦地へ向かう兵士に贈られたもので、送り出す人びとが寄せ書きをしました。虎の絵は兵士が無事に戻ってくることを祈って描かれました。

物資の不足と苦しくなる暮らし

戦争中には、兵器などの生産が優先され、人びとの生活物資は次第に不足していきました。衣料品や日用品、食料品などは配給制となり、人びとの自由な買い物は制限されます。このように物資不足が進み、暮らしが苦しくなる中で、各家庭から物資をさし出すことも行われました。

防衛食容器

金属不足のため、缶詰に代わり、磁器に入れた保存食が登場しました。



大切な家族が亡くなるし、必要なものが手に入れづらくなる。戦争って本当にこわいわ。

衣料切符

衣料品は、支払うお金に配布された衣料切符を添えないと買うことができませんでした。

蔬菜原票(左)

保存食品購入票(右) 左は野菜、右は砂糖などの保存食品を買うために必要でした。

民間金属類特別回収への感謝状

兵器生産に必要な金属が不足し、各家庭の鍋や釜なども回収されました。

学童疎開

昭和19(1944)年7月以降、日本本土への空襲の危険性が高まると、都市部の国民学校(現在の小学校)の児童たちは、学校ごとに集団で空襲の少ない地方へ移りました。これを学童疎開といい、港区域の児童たちも栃木県や東京都の多摩地域などへ疎開しています。学童疎開によって、児童たちは家族と離れて暮らし、苦しくても力を合わせて生活しました。



疎開した児童たちの集合写真

桜田国民学校(港区立御成門小学校の前身)の児童たちが、栃木県へ疎開した時に撮影されました。

ぼくと同じような年齢の子たちも、戦争で苦しい思いをしていたんだね。



疎開先で使われた丼鉢

南山国民学校(港区立南山小学校の前身)の児童が、疎開先での食事の時に使っていました。



疎開中の日記

高輪台国民学校(港区立高輪台小学校の前身)の女子児童が書いたものです。疎開先での生活、空襲や東京の家族を心配する気持ちなどが書かれています。

空襲

アメリカの本格的な日本本土への空襲は、昭和19(1944)年11月に始まり、港区域は11月24日に最初の空襲を受けました。昭和20(1945)年3月10日未明には東京東部を中心に、死者約10万人、被災者100万人以上を出した東京大空襲があり、さらに4月15日と16日、5月24日から26日の空襲によって、港区域は特に大きな被害を受けました。

灯火管制用2段階切替電球

ソケットにねじ込む強さで明るさを調節でき、夜間空襲に備えて、室内から光がもれないように塗装されています。



防毒面(防毒マスク)

実際にはあまり使用されませんでしたが、空襲では毒ガス攻撃も想定されたため用意されました。



焼けた硬貨

空襲の後に掘り出されたもので、黒く焼けこがれています。



鉄兜

これは空襲に備え、旧麻布区飯倉町で用意されたものです。約1kgの重さがあります。

